しらかしの木

役員会だより

東京都立八王子東高等学校 PTA

平成２０年８月２７日発行
会長　山口徹雄
愛知大会報告号
ホームページ
http://www.hachihiga.or
g/pta/index.html

愛知大会
速報

第 58 回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会・愛知大会

八王子東高等学校ＰＴＡ活動発表

８月２１・２２・２３日　名古屋市日本ガイシホール

スライドを使いながら、八王子東高等学校の発表　スピーチは日野出相談役

８月２１、２２、２３日の３日間、名古屋市の日本ガイシホールを主会場に開かれた第５８回全国高等学校ＰＴＡ 連合会大会・愛知大会の第１分科会「学校教育とＰＴＡ」において、八王子東高等学校ＰＴＡが「八王子東高校応援団」と題して事例発表を行いました。

発表者は日野出美智子相談役（前ＰＴＡ会長）。たった１０分の発表時間でしたが、学校と保護者ひとりひとりが信頼で結びつく事の大切さ、そしてそうした信頼関係を作るための工夫について当ＰＴＡの試みを熱く語り、約３千人の参加者に深い共感をよびました。（要旨４ページ）

愛知大会のシンボルマーク
（このはずくとカキツバタ）

愛知大会を終えて

発表者　日野出 美智子相談役
（前ＰＴＡ会長）

昨年の１２月のブロック会長会の席で都高Ｐ連から愛知大会の発表校をと要請があった時に、これは、東高の名前とＰＴＡの実践活動を全国に発信する願ってもないチャンスと、飛びついたのがはじまりでした。その時はここまでたくさんの方々のお時間と情熱を必要とする事になろうとは、正直言って思ってもおりませんでした。

５月の総会後から正式に＜チーム東＞が発足しました。（勝手に今ネーミングをつけさせていただきます）先ず、取り組んだ大会要項への掲載原稿推敲に約１ヶ月。規定の字数の中に東高ＰＴＡの全てを盛り込みたいと、それこそ１字１句精査する作業が続きました。私の書いた情熱はあってもつたない文章が、何人もの手を経て、洗練されぎゅっと凝縮された密度の濃い文章に変貌していくのは、圧巻でした。原稿を提出してから、当日発表用のスライド作りに取り組みました。これは主として、現会長、副会長が最新のパワーポイントの技術とセンスを駆使して貴重な時間を使って、何回も作り直しをしながら、作成してくださったものです。

ところがかなりの自信をもって臨んだはずの８月９日のプレで、みごとに私達の自信は覆させられました。プレに参加された方から、「東ＰＴＡを伝えるにはもっと強さが欲しい。」「初めて東高の事を聞く人には、この言葉は何のことか分かりづらい。」「語りが弱い、ナレーションになってしまっている。」　等。

正直「要項」の文章をそのまま語ろうと思っていた私はあわてることとなりました。又、夏休みのそれも旧盆の始まる前の土曜日に、いくら全国発表のプレだと言って３０人近い会員とＯＢがわずか１０分の発表を聞くために集まって熱心に意見を言ってくださること事態凄いとしか言いようがありませんでした。改めて、この情熱こそが東ＰＴＡの原動力だと感じました。同時にこれ程語りの力に信頼を寄せてくださっている方達の言葉に、感動し、その期待を裏切ってはいけないと強く思いました。書き言葉をもう一度私自身の話し言葉に置き換え、また、分らないと指摘された文章の言い回しを変えて、ＰＴＡの活動の原点になった思いに立ち返ることにしました。これは、自分の心の中に漠然と持っているＰＴＡへの思いを、聴く人に理解してもらえる言葉で形にする作業でした。改めてＰＴＡ本来の活動とは東ＰＴＡに足りないと思ったものは何だったのか、それをどういう方法で補っていこうとしたのか等、2 年間の会長生活、又その前の 4 年間の委員会活動での思いや気づきを、自身に問いかけることとなりました。そうして出てきた沢山の思いを、僅か１０分の言葉に込

めなくてはいけない。そぎ落とす作業は断腸の思いでした。最終的に原稿が確定したのは、発表の 2 日前、スライドが確定したのは前日だったのですから、最後に帳尻あわせが強いのは東高生ばかりでは無い事を、まさに地でいったようなものです。これはひとえに＜チーム東＞のメンバーが最後まで進化した完成度の高い発表をしたいとの熱意と、聞いてくださる全国のＰＴＡに活動のヒントを与えたいと心より思っていたから出来たことだと思います。

リハーサルに出席のために私だけ前日からの愛知入りでしたが、愛知大会を成功させるために、一生懸命最後の詰めをしている衣台高校と、愛知南高校のＰＴＡの方達には、同じＰＴＡとして、一緒にお手伝いしたい気持ちになってしまいました。先生方がメインで仕切っていらっしゃるのも、東京都のＰＴＡではあまり見かけられないことなので、正直驚きました。夏の最後のこの時期には、各学校で補習や、文化祭の準備等盛んな時でしょうから、いくら先生方もＰＴＡ会員とはいえ、この２足のわらじはかなりきついのではと、他人事ながら心配してしまいました。が逆に愛知県のＰＴＡを挙げてこの大会の成功にがんばっていらっしゃることが実感でき、それほど力の入った大会で、東高ＰＴＡの発表が出来る事の重さを改めて感じました。当日は、一緒に作りあげてくれた＜チーム東＞の仲間と柴田副校長が前列に座ってくださり、原副会長がＰＣ操作を担当してくださいましたので、私はただ話す事だけに注力出来、とても楽でした。講評担当が東と同じような進学校の岐阜県立大垣北高校の校長先生であったことも、私達にはラッキーだったと思います。その校長先生が「僕は千人までならあがらないけれど、それ以上だと」と冗談におっ

愛知大会ポスター

しゃいましたが、私には、不思議と怖さや足がすくむというような感じはありませんでした。入学式や卒業式に皆さんの前で話す時は、緊張して足ががたがた震えるのが常でしたが、逆に今回は一人じゃないんだという心強さの方が強かったと思います。

壇上で発表したのは私一人ですが、この発表を一緒に作り上げたのは、＜チーム東＞のメンバーや信頼と関心を寄せてくださった多くの会員、会員ＯＢ、校長先生はじめ先生方であったことを、改めて深く感謝いたします。

全国には様々なすばらしい活動をしているＰＴＡがあります。その中で八王子東高校ＰＴＡの活動はけっして奇をてらったり、派手なものではありません。子ども達と直接関わってする活動も極端に少ない方だと思います。私達の活動の原点は人と人との結びつきを大事にして、会員一人一人が子どもと同じように、東高ライフを楽しめるような架け橋となること。子どもに関する様々な悩みを一人で抱え込むことが無いように、仲間としての関係作りが出来

るような場の設定だと思っています。そうした活動を通して、学校理解がうまれ、保護者は先生への、先生は保護者への子どもを育てるという同じ目的で繋がった「同志」としての信頼関係ができること、これが私達が目指した東のＰＴＡ活動であり、会員一人一人のためにこの活動があるのだということを、全国に発信する機会でした。そこの思いが伝われば、私達の発表は成功だと思っています。

今回の全国大会で発表した内容は東高ＰＴＡの活動のほんのさわりの部分でしかありませんでした。それでもあの場に集った他校のＰＴＡの方達に何らかの感銘を与えることができたとすれば、それは日々ＰＴＡとして学校に関心を寄せ、活動に参加してくださっている会員の皆様お一人お一人の力の賜物だと思っています。

東高ＰＴＡは、20 年度山口会長というすばらしいリーダーを得て、ますます進化していっております。どうぞご自分達の活動に自信をもって、今年流、自分達流の活動を楽しんでください。どんなに大好きなＰＴＡでも、活動にかかわれるのは、子どもが卒業するまでの 3 年間しかないのですから。八王子東高校とＰＴＡの皆様の益々のご発展と、ご活躍を願って。

発表要旨

「八王子東高校応援団」

～子ども・教師・保護者で繋ぐ信頼のトライアングル～

八王子東高等学校は、創立３３年とまだ伝統浅き高校です。敷地も変則的で必ずしも恵まれているわけではありません。しかしそれを補ってあまりある関係者の情熱と努力により、「進学指導重点校」として高い進学実績を上げています。「文武両道」の精神の下、部活動はもとより学校行事もとても盛んですが、生徒たちが自主的に運営し先生が陰で支える方針が徹底しています。また、反面生徒の夢の実現のために、講習や補習など最大限の支援をしてくださる先生方、そうした先生方と生徒の間に培われた信頼関係がいざという時、どれほど大きな力を発揮するのかを私たちは２年前の未履修問題の時の子どもたちの態度から学びました。そしてこの学校の教育方針が間違っていないことを確信致しました。

子ども達と同じように保護者ひとりひとりも、もっと学校のことを知り信頼関係でつながること、それがＰＴＡができる一番の学校支援になると考え、そのためにはまず保護者にもっと気軽に情報提供をし、学校のことを知ってもらいたいと思いました。そこで一斉配信メールの導入やホームページの充実に取り組みました。また内外から評価の高い広報誌「志邏伽之」も常に大きな役割を果たしてくれています。と同時に、クラスごとの親睦会やＰＴＡ委員と先生方の懇親会、文化委員会のバス研修などを通じて、先生と保護者はもちろん保護者同士が親しくなる機会を多くしました。そうしたことの積み重ねで、子ども達を頂点に保護者と学校が信頼で結ばれ、支えあう信頼のトライアングルができてきたように思います。

最後に、ＰＴＡ活動を通じて学校理解が生まれ、信頼のネットワークをもつことで、会員全員がそれぞれの学校の熱き応援団となることを願ってやみません。

当日の発表を見て

青柳 圭子相談役（前ＰＴＡ副会長）

当日の発表は、【「学校教育とＰＴＡ」～高校教育の進む方向～】のテーマの下、北海道札幌月寒高校・八王子東高校・兵庫県の全校生徒100 人足らずの分校である篠山産業高校丹南高・野球で有名な愛媛県立松山商業の発表の後、助言者からのコメント・質疑応答と進められました。背景もカラーも違う各校でしたが、子ども達のいきいきと輝く顔を保護者のみんなに見てもらいたい、学校とＰＴＡの信頼関係を築き、保護者間あるいは地域との絆を大切にという思いのもとに情熱を持って活動しているＰＴＡの姿はどこも共通でした。また、メルマガ発信や研修旅行などを企画してもなかなか思わしい成果があげられなくて、アイデアを出して実行しようとしても動かない悩みを発表した学校もありました。

わが高の発表は１０分という制約がありましたが、より良き発表にしたい、これで私達の思いが伝わるだろうかと文字一字一句・スライド一枚一枚に最後までこだわりぬいた事が実を結んだ発表になったと感激しました。

日野出前会長の発表は品格漂うものであり、私たちのメッセージは会場３０００人の人々に十二分に伝わりました。発表後にコメントを下さった助言者の岐阜県立大垣北高校の古川校長は、八王子東高校は先生・生徒・保護者のやる気、信頼の絆がそれぞれの育成につながっていることがよく分かる発表だとほめて下さり、広報委員会も７０人という部員をマネージメンとしようとするとそれだけで大変なのにうまくいってる、親睦会もこんなにたくさんの先生方・保護者で盛り上がってと、「うらやましい」‥という言葉がしきりと出てきました。

ホームページやメール配信も導入しても更新をなされていない学校も多いとの事。会場からも情報保護と業者選定に関する質問をいただき、私達の活動が、全国の悩みを抱えているPTA 活動のヒントになったかと思います。

改めて、よきリーダとしての日野出前会長・山口会長・役員の皆様との出会い、そしてすばらしい先生方、委員の皆様にパワーを頂いたこと、多くの保護者の皆様と一緒に有意義な日々を過ごせたことに、東の保護者で良かったと心から感謝いたします。

みそカツ、守口大根漬けなど名古屋の味満載の「大会弁当」

発表の成功を確信！

山口 徹雄ＰＴＡ会長

■ＰＴＡ全国大会の概要

ＰＴＡ全国大会は、㈳全国高等学校ＰＴＡ連合会による大会です。毎年１回開催され、今年度が第５８回大会となります。今年度の会場は愛知県でした。なお昨年度は埼玉県、来年度は沖縄県で、再来年度は東京都で行われる予定になっています。

今年度の主会場は、日本ガイシホール。名古屋駅から東海道本線で約１０分の笠寺駅から徒歩数分。朝７：０９新横浜発の新幹線に乗り、現地には９時１０分頃に到着しました。

■第１分科会について

分科会は、その名のとおり７つに分かれての同時進行でしたが、東高が発表した第１分科会の会場は、午前中全体会が行われたガイシホールをそのまま使って行われ（他分科会は別会場へ移動）、収容人数も多いメイン分科会で（少なくとも私はそう理解しております）、３千名程度の参加者があったようです。

■発表準備

発表準備は相談役２名と正副会長３名が中心になり、他役員も適宜参加しながら進めました。また、途中数回、学校側からの意見もいただきました。まず、〆切期限の早かった要項（報告内容がまとめられた冊子）の原稿を仕上げました。日野出相談役の原案に対して一字一句まで議論を重ねて磨き上げました。

次にその原稿に沿って、発表時にスクリーンに映し出すスライドを作成しました。スライドはパワーポイントで作成しましたが、簡素にするのが良いか、どんどん画像を展開するのが良いか、文字と画像の量的バランス、色の使い方・・・等々、選択肢が無限にあるので、結果として相当な試行錯誤を重ねることになりました。

また、当初の予定では、既に完成している要項原稿を読み上げる形で発表することを想定していたのですが、８月９日に行ったリハーサルの結果、それでは、訴える強さに欠けてしまうと判断し、発表原稿に大幅な修正を加え、スライドも組み直しました。

正直なところ、当初はここまで手間暇をかけることになるとは考えていなかったのですが、妥協を知らないガッツある（？）メンバーが揃い、とことん煮詰めました。その結果（もちろん、発表者である日野出相談役なら大丈夫だろうという思いもありましたので）、少なくとも私（山口）は、発表当日は既に発表の大成功を確信して、ウキウキしながら会場に向かったのでした。

■発表結果

分科会での発表は、客観的にみても大成功だったと思います。全国のＰＴＡの皆さんに、貴重な参考情報を伝えることができたと同時に、八王子東高等学校の素晴らしさを理解していただけたと思います。

名前は知らないけれど見覚えのある他の都立高ＰＴＡ会長が、『お疲れ様でした』とわざわざ声をかけてきてくれたし、都立高校Ｐ連の関係者の方々は、とても満足して嬉しそうにし

ていました。

他の発表校３校との組み合わせも、互いに補完し合ったという感じで良かったし、助言者であるお二人の校長先生も、含蓄に満ちたコメントを寄せつつ、当高ＰＴＡの発表を絶賛してくださいました（と私は感じました）。

さらに質問者にも恵まれ、時間がなく割愛していた部分にも言及できました。すべての事例発表と講評、質問が終わり、分科会が終了したときには、会場全体に充実感と爽やかさが満ちていました。

■全国大会というものについて

全国大会を実現するためには、多大なコストが発生します。参加者の旅費・会場代・資料代などの金銭的コスト、会場となる都道府県のＰＴＡ関係者や学校がスタッフとして費やす労力、これらを考えると、これは壮大な無駄遣いではないのか？という疑問が生じます。

しかし同時に、北海道、兵庫、愛媛など、各地のＰＴＡの話を聞きつつ、見聞を広げ、自校ＰＴＡについて外部の目から客観的に考えるには、こういう大会は必要だと思いました。便利な世の中ですが、一堂に会し生の声を聞き、生の雰囲気を感じとる、そうでないと分からない部分が確かにあると感じました。平成２２年度の第 60 回全国大会は東京大会です。当高の役割は見えないが、コストを上回る成果を上げる努力が、開催都道府県には求められています。

愛知大会メインテーマ

「絆～愛と知で結び合う心と心～」

このテーマで全国からＰＴＡ関係者約１万人が集結

☆プログラム☆

【８月２２日・大会第１日目】

9：40～　**開会式**

全体会　記念講演「日本経済のゆくえ」　水谷研治　中京大学名誉教授

14：00～　**分科会**

16：00　●第１分科会「学校教育とＰＴＡ」
●第２分科会「進路指導とＰＴＡ」
●第３分科会「生徒指導とＰＴＡ」
●第４分科会「家庭教育とＰＴＡ」
●特別第１分科会「情報化社会とＰＴＡ」
●特別第２分科会「防災活動とＰＴＡ」
●特別第３分科会「世界の親子の絆意識」

八王子東高校が事例発表をした第１分科会

【８月２３日・大会第２日目】

10：15～　**対談**　奥田瑛二（映画監督・俳優）　聞き手　日比英一

11：20～　**閉会式**

第 20 回東京地区高等学校 PTA 連合大会報告

大会テーマ　『世界の親子の絆意識』

サブテーマ　「国際化時代の中で親子の絆を見直そう」

日時　7 月 3 日（木）18 時 30 分～21 時 50 分

場所　国立オリンピック記念青少年総合センター　大ホール

◇マリ・クリスティーヌ氏による基調講演

私は父親の仕事の都合で４才まで日本に、その後ドイツに４年、アメリカに１年、イランに４年、タイで２年暮らしました。それから単身日本に帰り、日本の大学（上智大学国際学部）に入りました。その間色々な文化、宗教、人種、考え方に接し、他国の文化を知りそれを尊重することで、相手からも受け入れてもらえることを学びました。その経験を子育てに生かし、国際的な子どもを育てたいと思っています。

アメリカやヨーロッパは自由な社会のように言われますが、日本の子どもほど自由を与えられている国は世界にありません。それだけ治安が良いと言うことでもあるが、夜遅くまで子どもが単独で外出している国はありません。

日本の親子は密着しているように見えますが、ルールがない家庭が多く、子どもは自分の行動の責任を取ろうとしません。アメリカでは子がルールを破った場合厳しい罰を与えルールを守らせようとします。アメリカでは離婚も多く、実の親が子どもの面倒を見ていない場合もあるのですが、それでも社会全体で子育てをしています。コミュニティーが機能し、近所の子が悪いことをすると大人は注意をします。

家族の形態は最近、日本でも様々になってきていますが、親から子へと大事なことは伝えなければなりません。子どもは本心では「枠」を求めています。「枠」があるから羽を伸ばすことが出来るのです。大事なことは厳しく、嫌われようと言うことが大切です。それが真の親子の絆だと思います。また日本ではタブーのように言われますが、性教育に関しても子どもがティーンエイジャーになったら実の親から教えてください。親がきちんとした教育をしなければ誰がするのでしょうか？子どもも不快な顔をしても、本心の所では望んでいると思います。

◇　シンポジウム

●パネリスト

日本の高校に在籍中の外国人高校生６人

（オーストラリア３人、フィンランド２人、中国１人）

●コーディネーター

玉木　研二氏（毎日新聞論説室専門編集委員）

玉木氏の司会によりまず、自分の親子関係について話してもらい、（全員、良好）次に日本の学校について話してもらいました。

日本では授業中に寝ていたり、ゲームをしているので、驚いたとのこと。外国の授業はディスカッション形式や発表の機会が多く、寝ている間がないし、中国では先生が厳しく、宿題も山ほど出るとか。日本の先生は勉強以外も相談にのってくれ優しいと感じたそうです。また、部活がとても忙しいのも驚き。でも、みな日本の友人とカラオケをしたり、プリクラをしたり、高校生らしい生活を楽しんでいるようでした。

（報告者　書記　多田みゆき）